

「中国と私」—中国との3つの出会い

- < 1 > M君親子との出会い
- < 2 > 私の運命を変えた一冊の本
- < 3 > 日中交流の三原則

< 1 > M君親子との出会い

私は1929年、茨城県筑波山麓で生まれた。2歳のとき、瀋陽郊外の柳条湖で関東軍が仕かけた満州事変（中国では918事変と呼ぶ）を機に日中戦争が始まっている。世界恐慌の真ただ中で生まれ、戦争と軍国主義の時代に軍国少年として育った。

1936年に小学校に入学したとき、隣のクラスにM君という目立った少年がいた。背が高く、坊ちゃん刈りで服装もきちんとしていた。坊主頭で粗末な身なりの私たちと違っていた。しばらくしてみんながM君をいじめるようになった。教室や校庭の隅で数人がM君に乱暴を働いた。M君は皆のなすがままにしていた。M君が大声で泣き出すと乱暴は止んだ。「チャンコロ、早くシナへ帰れ」と叫ぶ者がいた。時代の風が子供心を蝕んでいた。

後で知ったのだが、M君は中国人だった。当時はシナ人と呼ばれ、「チャンコロ」とバカにされることもあった。しかし、M君は休まずに学校にきた。2年生になったある日、校庭でまたみんながM君をいじめていた。しかし、今日のM君は激しく抵抗している。上級生も出てきてM君が倒された。私は急にM君がかわいそうになり、われを忘れてM君に加勢し始めた。ふだんおとなしい私が暴れ出したので、みんなびっくりして騒ぎは収まった。M君と2人で池の岸に腰かけ、一緒に泣いたことを覚えている。

しばらくして、M君はぱったり学校に来なくなった。駅前通りの床屋だったM君の店もいつの間にか閉まっていた。そんなある日、背の高い男の人が、M君を連れてわが家にやってきた。私の父に「国へ帰ることになりました。息子がお宅の息子さんにお世話になったので、ご挨拶にきました」という。この年、1937年7月には、盧溝橋事変を機に、日中全面戦争が始まっている。わが家から帰っていく2人の後姿を見ながらとても悲しくなった。そして中国とはどんな国だろう、どうやって帰るのだろうと考えていた。このM君親子との出会いが、私と中国との最初の出会いだといっている。（「日本と中国」08.2.25）

< 2 > 私の運命を変えた一冊の本

1945年8月15日、旧制中学4年の夏、私の家に近所の人たちが集まって玉音放送を聞いた。雑音が多く聞きとれない人が多かったが、私はすぐ理解した。「戦争は終わったよ。日本が負けたん

だ」と解説すると「バカをいうな。日本が負けるわけがない」と勇ましいことを言う人が多かった。私は頭の中でひとつの世界が音立てて崩れていくのを感じた。近所に敗戦を告げ回ったあと、裏の林に入って泣き崩れた。中国で戦死した2人の兄の名前を何度も呼んだ。

虚脱状態から抜けられず、悶々としていたある日、たまたま上京の機会に恵まれた。必死で列車のデッキに掴まって3時間。上野駅近くのヤミ市で生活物資をあさっていると、目の前に本屋があった。飛び込んで財布をはたいて数冊の本を買ったが、何とこの中に私の運命を変えた1冊の本が入っていたのだ。米国の世界的ジャーナリスト、エドガー・スノーの『中国の赤い星』である。兄たちが戦死した中国というタイトルにひかれて何気なく買ったのだが、読み始めるとたちまちとりこになった。それまで教え込まれていた中国のイメージとは全く違った世界がそこにあった。

延安の洞窟のほの暗いランプの下で、毛沢東とその同志たちが語る中国の未来、アジアと世界の未来はとても魅力的だった。彼らは日本の敗戦も予言していた。八路軍は実に質素で規律正しく、人民への奉仕の精神に溢れていた。私はこの「赤い匪賊」たちに強い親近感を抱き、彼らがめざす新しい中国に深い共感を覚えた。

徹夜で読み終え、外へ出ると東の空が明け初め、筑波山が黒々と雄姿を現していた。そこで私は心に決めた。兄たちは中国と戦ったが、弟の私は中国と仲良くする仕事をしようと決心した。こうして、虚脱から脱し「中国」に心を定めた私は法・経コースを勧める教師たちに逆らって、迷うことなく東京外語中国語学科を受験、無事進学した。

スノーさんが亡くなった時、周恩来総理は夫人に弔電を送り、「スノー先生は中国人民の真心こもる永遠の友人です。先生は中国革命の最も困難な時期から私たちと友情を結び、数々の困難をおかして、中国革命と労農赤軍の真の姿を米国人民、世界人民に熱情込めて伝えてくれました」と述べている。1975年、初めて中国を訪れた際、北京大学の一角にあるスノーさんのお墓にお参りし、私と中国を結びつけ、私の人生を変えた本の著者に心からの感謝を捧げた。これが私と中国との第二の出会いである。（「日本と中国」08.3.5）

<3> 日中交流の三原則

東京外語在学中、翻訳のアルバイトに通った(社)中国研究所にそのまま就職し、4年間勤めた。4年目に中国の労働問題を担当した私は、日本の労働問題の勉強を始めたが、折から戦後労働運動の高揚期で、労働問題の研究に熱が入った。しだいに日本の政治、経済にも関心が広がり、ついに労働経済関係の研究所に移籍し、中国問題から離れてしまった。その後、労働問題の研究者として20年余り働いているうちに、横浜国大経済学部教授だった長洲一二さんと研究会などで知り合い、後に社会党、共産党を巻き込んだ構造改革論争の際は長洲さんの理論グループに属し、労働問題の立場から論争に参画した。

こうした経緯もあって、長洲さんが当時横浜市長だった飛鳥田さんに請われ、1975年の神奈川県知事選に出馬したときは、政策づくりをはじめ全面的にバックアップした。対立候補に大差をつけ

て初当選した日、長洲さんから「ぜひ一緒に県庁に入ってほしい」と強い要請を受け、知事直属のスタッフとして、夢にも思わなかった県庁職員になった。44歳の転職だった。

長洲県政の重要な特徴のひとつに、外交への市民参加をめざした「民際外交」があった。米国、ソ連、ドイツ、韓国、スウェーデンなどの地方自治体と友好提携を進め、国の外交ではできない市民交流を重視した。その多くに私も参画したが、長洲さんが最も力を入れたのが中国との友好交流である。川崎市が瀋陽と提携していたこともあって遼寧省との友好提携を進めることになり、私も交渉に当たった。

このとき長洲さんは、中国との交流について「3つの原則」を決めた。①2千年にわたる中国文化の恩恵に対する「尊敬と感謝」、②にもかかわらず中国を侵略し、多大な犠牲を強いたことへの「謝罪と反省」、③日中の平和と友好なしにアジアと世界の平和もないことへの強い「希望と確信」、の3つである。

この考え方は中国側の深い共感を呼び、話はトントン拍子に進んだ。そこで友好協定に「不戦の誓い」を入れたいと希望したが、これは中央政府の問題だと言って交渉は難航した。やがて北京から「不戦の誓い」を地方から積み上げることには意味があるとのニュアンスが伝えられ、1983年、神奈川県庁で長洲知事、全樹仁省長により全国で初めての「不戦の誓い」の入った友好協定が調印された。当時瀋陽市長で、後に省長になり、現在は共産党政治局常務委員の李長春さんにも大変お世話になった。今年で25周年になる。（「日本と中国」08.3.15）